

2021（令和3）年度 日本教材学会中国四国九州支部大会での講演について

講師：山陽学園中学校・高等学校 地歴部顧問 教諭 井上貴司先生

演題：「瀬戸内海の海洋ごみ問題の解決に向けての取り組み

～問題の「自分事」化に向けた SDGs の視点からの実践～

要旨

瀬戸内海は「瀬戸内国際芸術祭」が開催され、国内外から多くのお客様が訪れるなど、その多島美、漁業、海運など多くの恩恵をもたらす。しかし、13,000tもの海洋ごみが堆積しており、漁獲量の減少や景観美を損ねるなど、深刻な影響をもたらしている。

瀬戸内海は閉鎖性海域であり、海洋ごみは他の海域からの流入は少なく、海洋ごみの約7割は河川を通じた生活ごみの流入である。

地歴部では13年前から瀬戸内海の海洋ごみ問題の解決に向けて、回収活動と啓発活動を活動の柱と位置づけ、取り組んできた。2015年に国連にてSDGsが採択されると、SDGsの17の目標を地歴部の活動に照らし合わせ、目標達成の進捗度や地歴部の目標へのアレンジに取り組み、複数の目標を組み合わせた実践に取り組んでいる。

SDGsは持続可能な開発目標と訳される。地歴部では、SDGsの目標達成に向けて、現在から未来へ向けた持続可能な取り組みとして、現在堆積する海洋ごみを回収活動で減少させること、未来に発生する海洋ごみを啓発活動で抑制することで、美しく生物多様性に富む瀬戸内海を目指している。さらに、SDGsのゴールは2030年である。在籍する中高生は22歳から27歳をむかえ、社会の中心である。その時、どんな地球・世界・社会・地域になってほしいのか、したいのかイメージして目標設定し、実践することで、中高生の中には遣り甲斐や達成感が生まれ、次の活動への高い意識付けとなっている。

実践の中で、回収量を大きく上回るごみの発生量を確認した。ごみの発生量の抑制に向けて啓発活動は、メディアからの情報発信、学会等での発表、展示会・出張講座の開催、体験学習会・展示会の開催など多岐にわたる。啓発活動をより効果的な活動にするためには、海洋ごみ問題を他人事ではなく、「自分事」として認識してもらい、日常生活において行動を伴う必要がある。つまり、海洋ごみと陸域生活の人との距離を縮める実践が必要であると自覚し、「自分事」化への実践に力を入れている。

「自分事」の実践として、スーパーのような商業施設から毎日の生活から促すこと、用水路調査による地域の足元の様子を出張講座で取り上げ、地域から促す2つの実践を行い、その効果を確認した。

以上の実践は中高生だけではなく、多くのステイクホルダーとの協働により、実践が可能となっている。産官学民による協働と、森川里海の連環を促すことで、少しずつではあるが、沿岸域の意識と行動に変化が見られる。

毎年、中高生のメンバーは変わるが、課題を見つけ、その解決に向けて、沿岸域へアプローチした実践についてお話させていただきます。